

# 縄文時代のかごの研究

柳原 梢子

**要旨** 縄文時代には土器や石器をはじめ様々な道具が用いられたが、その一つに植物を編んで成型した製品がある。それらは先史時代から現在まで生活の中で重要な役割を占め続けてきた稀な道具である。本論文ではそれらのうち一群を「木製編物製品」と呼び、全国の縄文時代の遺跡から出土した木製編物製品について検討した。第1章では、編物製品を検討する上で重要な用語や分類方法、編物製品の研究史と課題、木製編物製品の特性、編み方の分類について概要を述べた。第2章では、木製編物が出土した43遺跡の編物の詳細について、報告書等から収集したデータをもとにさまざまな検討を行った。まず出土編物の時期と場所を概観すると、現在のところ最も古いのは縄文時代早期初頭の粟津湖底遺跡出土編物であり、その後は晩期終末以降現在まで用いられ続けている。上限についてはさらに遡って発見される可能性が高い。出土地域の分布は遺存状況に因るところが大きい。東北・関東・九州から多く出土している。出土状況を見ると、大きく貯蔵穴内、水場遺構内および付近、貝塚や捨て場、2次堆積に分かれ、地域や編物の種類によって出土状況に偏りがみられる。また、編み方に注目すると、広義の網代編みともじり編みには地域により明らかに分布の偏りが見られる。編み方と時期の関係をみると、多少の偏りはあるものの、早期の段階で後に見られる編み方の多くが出揃っていたことがわかる。また、近年佐賀県佐賀市の東名遺跡から縄文時代早期のかごが多数出土し、注目を集めている。筆者は、様々な方のご好意から東名遺跡の発掘調査に参加し、またかごを観察する機会を得たので、第3章では東名遺跡出土のかごについて検討した。論文末には資料として、遺存状態のよい5遺跡について報告書等から収集したデータを記載した。

## はじめに

本論文は、平成18年度東京大学文学部歴史文化学科考古学専修課程卒業論文を一部改変したものである。ページ数の関係で省略した部分が多くあるため、詳細に関心を持って頂いた方は卒業論文を参照していただければ幸いである。

縄文時代には土器や石器をはじめ様々な道具が用いられたが、その一つに植物で作られたかごがある。かごは、先史時代から現在まで生活の中で重要な役割を占め続けてきた稀な道具である。本論文では全国の縄文時代の遺跡から出土したかごについて検討した。また、近年佐賀県佐賀市の東名遺跡から縄文時代早期のかごが多数出土し、注目を集めている。筆者は、様々な方のご好意から東名遺跡の発掘調査に参加し、またかごを観察する機会を得たので、第3章では東名遺跡出土のかごについて検討した。

## 第1章 編物製品の概要

### 第1節 用語と研究対象について

はじめに、用語の説明をしておきたい。先史時代から現在まで、何らかの素材を編んで作った製品は数多くある。これらの製品は考古学では一般に「編物製品」「繊維製品」「編み物」などと呼ばれている。これらの製品の分類については、野田真弓による青谷上寺地遺跡出土のかごについての研究の中で述べられているものが参考になる（野田 2005）。野田は「編み物」を最も包括的な用語とし、これを「立体的な製品」と「平面的な製品」に分け、さらに前者を「かご（ザルも含む）」「箕（み）」「筥（うけ）」「編み袋」、後者を「網代」「筵（むしろ）・簀（す）」「簾（すだれ）」「縫織品」「網」「組紐」に分類している。この分類は、編物製品の種類を理解する上では非常に参考になる。しかし、実際に遺跡から出土する製品の分類としてはあまり適していないように思われる。

この分類では、「かご」「箕」「筥」「網代」「筵・簀」「簾」の区別は全体の器形がポイントとなる（「網代」「筵・簀」「簾」の相互の区別は編み方による。表1参照）。逆に共通することは、草本植物や、木本植物を割り裂いたものやその皮などを編んで面を形成する道具だということである。遺跡から出土する編物製品の多くは、製品の一部分が遺存したものであって全体の復元が困難なものが多い。そこで、上述したような「草本植物や、木本植物を割り裂いたものやその皮など、植物のある部分を細長く抽出し、それを編んで成型した道具」を一括して扱うことにする。この一群の道具は、遺物として区別しにくいというだけではなく、生活の中の物質文化全体において一つの群を形作っていると筆者は考える。少なくとも、布・網（糸状の繊維を編んだもの）・紐・縄などを含めた編物製品の中で互いに類似した道具と言って良いと思う。この論文では、この一群の道具を扱い、その中でも特に立体的な製品に注目して考察している。

さて、この「かご」などの一群の道具を何と呼ぶかであるが、この論文では「木製編物」と呼んでいる。また、布は「編布」、紐や縄は「紐」「縄」と呼んでおり、この論文では対象からはずしている。そして、「編物」のうち立体的なものを「かご」とし、器形がはっきりわかるものについては「筥」「箕」といった用語も使用している。編布と紐・縄を除いた理由は、道具としての性質が異なると考えるからである。特に紐・縄についてはその理由が強い。布は、場合によっては似たような道具として用いられる可能性もあるが、研究方法が広がりすぎて筆者の力量に余るため本論文では除外した。

まとめると、本論文では「草本植物や、木本植物を割り裂いたものやその皮など、植物のある部分を細長く抽出し、それを編んで成型した道具」を「木製編物」として対象とする。その中でも特に立体的なものを「かご」として中心的に扱う。

また、研究対象とする時代は縄文時代である。いずれは他の時代にも研究対象を広げたいが、現時点での筆者の力量を考え、縄文時代に限定した。

表 1 野田氏の分類（野田 2005 より著者作表）

製品名	形 状		編み方
かご	立体	器状	
箕	立体	半円形	
筥	立体	砲弾型の胴+返し	
編み袋	立体	袋状	伸縮性あり
網代	平面	敷物	網代編み
筥・箕	平面	敷物	もじり編み
簾	平面		粗いもじり編み
縫織品	平面		
網	平面		
組紐	平面		

## 第 2 節 編物製品の研究史と課題

### 1、研究史

縄文時代に編み物が用いられたことを最初に指摘したのは、1887 年に Edward S. Morse が大森貝塚出土資料に編み物の圧痕があることを報告した例であるようだ。1890 年にも、陸平貝塚出土土器の底部に編み物の圧痕があることが報告された。しかしこれらは単に編み物の痕跡があることを指摘したにとどまっていた。

先史時代の編み物の編み方を初めて検討したのは、1899 年の坪井正五郎の研究である（坪井 1899）。坪井は土器についた網代形編み物の圧痕を観察し、編み方を 7 通りに分類した。また、「経」「緯」「超え」「潜り」「送り」など、その後の編み物研究に用いられる用語を定義し使用した。その後も編み方についての研究が数人の研究者によって行われた。1942 年までには杉山寿栄男が土器圧痕をさらに詳しく検討し（杉山 1942）、1964 年には小林行雄が土器圧痕や出土直接資料を広く検討している（小林 1964）。その後 1968 年から 1971 年にかけては荒木ヨシが土器底部の圧痕によって編み方の詳細な分類を行い（荒木 1968；1970；1971）、76 年には渡辺誠が「スダレ状圧痕」について研究している（渡辺 1976）。こうして 1970 年代までに、編み方の検討・分類に関する研究が進んだ。これらの研究をもとに、1980 年には植松なおみが編み物出土遺跡の集成を行い、編み物研究が総合的に行われる基礎を作った（植松 1980）。

ここまでの研究でも編み物の素材や民族例との類似に言及はされていたが、本格的な検討は行われていなかった。1980 年代から 90 年代にかけては、渡辺誠が編み物の素材の検討や民俗例との対比を積極的に行った（渡辺 1994；1996；1999）。また名久井文明も、素材の入手から製作まで民俗事例を広く収集・検討し、縄文時代の技術が現在まで継続されていると論じた（名久井 1987；1998）。2000 年以後もその傾向は継続されており、都立大学のグループによる民俗例の収集（都立大学人類誌調査グループ 2002）などが積極的に行われている。編み方については細分化よりむしろ整理される方向にあり、新しい動きとしては名久井が「編む」と「組む」の区別を提唱した（名久井 2004）。また最近では佐々木由香らが素材の検討に力を入れている（佐々木 2006）。

最近の編み物研究で画期的であったのは、2005年に野田真弓が行った、青谷上寺地遺跡出土かごの研究である。野田は用語や編み方の整理・再定義を行った上で、かごの部位ごとの編み方を検討し、その組み合わせを類型化して示した。

## 2、今後のかご研究の課題と本論文の目的

以上見てきたように、かごの研究において編み方自体の分類はされつくした感がある。そこで今後の課題としては、5つの方向が挙げられると思う。

### (1) かごの用途の研究

遺跡におけるかごの出土状況や民俗例との対比から、先史時代の生活体系におけるかごの用途・機能や位置づけを明らかにする。遺跡内でのかごの使い分けも検討する必要がある。かごの器種の分析も重要な手がかりとなる。

### (2) かごの素材の研究

素材の樹種を同定しそれを当時の周辺環境と対比させることで、当時の人々が周辺環境とどのように関わっていたのかについての理解を深める。遺物自体の素材の分析と同時に遺跡周辺の古環境の復元が必要である。

### (3) かごの時空間上の分布の研究

1980年に植松によって集成された後、遺跡から出土したかごの全国集成は行われていない。現在までに出土しているかごの編み方を空間的・時間的に広く検討し、時空間による分布の偏りや、かごがいつから使われたのかについて明らかにすることが必要である。70年代までの編み方の分類研究の中では、「時代が下るにつれて編み方が発達する」ということがしばしば主張されていた。しかし近年東名遺跡において出土した縄文時代早期のかごを見ると、非常に精緻で多様な編み方がされている。そのため研究者間では、縄文早期には編み方の多くがすでに確立していたのではないかという意見が出されている。また同じく70年代までの研究では編み方の地域差が指摘されているが、説得力のある詳細な検討はなされていない。

### (4) 編み方の構成の検討

これまでの研究では、かごに見られる様々な編み方を同じレベルで捉えており、例えば「本体の成形」「補強」「飾り」といった位置づけに関する分析は行ってこなかった。しかし、かごの用途や生活体系における位置づけを考える上で、編み方の構成における各要素の位置づけの違いや意味を捉えることが必要である。

### (5) 研究の総合化

(1)～(4)を総合的に検討し、当時の人々が生活の中でかごをどのように使用していたのかを明らかにする。例えば、用途・器種・素材の相互関係についてなどが検討事項である。

そこで本論文では、現時点までに縄文時代の遺跡から出土しているかごを集成したデータをもと

に、編み方や出土状況の時間的・空間的な偏りについて検討する（上記の(3)と、(1)の一部）。また、筆者が関わった東名遺跡出土のかごについて詳しく紹介し、かごの構成要素のひとつである帯部について検討を加える。

### 第3節 木製編物の特性

#### 1、木製編物の遺物としての特性

木製編物の研究資料について植松の分類を参考に整理すると、以下のようになる。

##### (1) 直接資料：編物自体の遺物

(A) 原型の復元が可能な資料

(B) 原型の復元には不十分だが同様の編み方がなされている断片

<特徴>木製編物は植物遺存体であるため通常の状態では腐って分解されてしまう。しかし、低湿地で水漬けになっていたり、漆膜で保護されているような特殊な環境下では遺存する。

##### (2) 間接資料：かご類や編物の存在を間接的にだが明確に裏付ける出土遺物

(A) かご型土器：土器製作の際にかごを型として成形した土器。主に古墳時代に製作された。

(B) 土器底部圧痕：土器製作時に敷物として使用した編物の痕跡が土器底部についたもの。縄文土器に多い。

<特徴>腐食しやすい直接資料を補完する重要な役割を果たすが、これらの間接資料は編物の使用状況のごく一部しか反映していないことに留意する必要がある。

##### (3) 類推資料：かご類や編物の存在を示唆する出土遺物

(A) 土器の施文模様：明らかに編物をモチーフとしたものが存在すると指摘されているが、その判断は難しい。

(B) 製作道具：主に編布製作と道具の関係を渡辺が研究しているが、編物製作に使われた道具と断定することは難しい。

(4) 民俗資料：現在も使われている編物の使用方法や機種・編み方等を分析することは出土資料の解釈に非常に役に立つ。しかし、そのまま先史時代の道具のあり方と結びつくわけではないことに注意が必要である。

木製編物は遺物として残ることが少なく、時間的・空間的に偏った出土の仕方をするのが想定される。よって(1)～(4)のような様々な資料を用いて、先史時代の木製編物の使用のあり方を考えていく必要がある。

#### 2、カゴの機能的特性

ここでは、かごが容器としてどのような特徴を持っているのかについて述べたい。これについて

は植松が言及している（植松 1980）。以下はその説明と筆者の補足である。植松は、同じ容器形を呈する土器との対照によりかごの特性を考察している。

かごの特性としてまず、煮沸具としては不適當である。煮沸には土器が適している。貯蔵具としては、土器が密閉型であり液体貯蔵に適しているのに対し、かごは通気性・通水性に優れる。この特性を生かして物品の乾燥や、逆に水さらしなどに広く用いられる。運搬具としては、液体運搬には不向きである。液体運搬には土器の方が適している。しかし土器はより硬いものを入れると壊れてしまう恐れがあるのに対し、かごは柔軟性があるため石材など固いものの運搬に有利である。また、かごは軽量であるため持ち運びがしやすい。

製作に関しては、かごは素材を自由に継ぎ足すことができ、焼成などの条件も考慮しなくて良い。また大きくても軽く、扱いやすい。そのため必要に応じた形態や大きさのものが作りやすいということも大きな特徴である。

従ってかごは容器として、木製容器などととも土器と機能上の分担があったことが推察される。かごは1、で述べたように遺物として残ることが少ないため従来あまり注目されてこなかったが、縄文時代の生活の中で重要な役割を果たしていたと考えられる。

#### 第4節 編み方の分類

研究史の節で述べたように、これまでに編み方に関する研究は非常に詳細に行われている。しかし分類方法や呼び方が研究者間で異なっている。編み方の分類や呼び方は、研究者の依って立つ立場（民俗例に依拠するか純粋に構造を見るか、など）によって異なってくるためである。ここでは筆者なりに編み方を整理し、それに従来分類されてきた編み方を当てはめてみたい。

編み方を説明する前に、かごや木製編物に関する用語を説明しておきたい。

##### 1、部位

かごの部位は、野田の分類をもとに図1のように分類した。上から説明すると、「口縁部」はかごの縁の部分の処理（縁仕舞）を施した部位のことである。かごの側面の口縁部を除いた部分を「体部」と呼んでいる。体部にはしばしば、かごの側面を1周取り巻いて、基本となる編み方とは異なる編み方が帯状に施される場合がある。これを「帯部」と呼んでいる。帯部の中にはかごの口縁部直下と底縁に施されるものがあり、これをそれぞれ「口縁帯部」「底縁帯部」と呼んでいる。それ以外の体部に施された帯部は「体部帯部」と呼び、位置によって「体部上部帯部」「（体部）中央帯部」「体部下帯部」と呼んでいる。

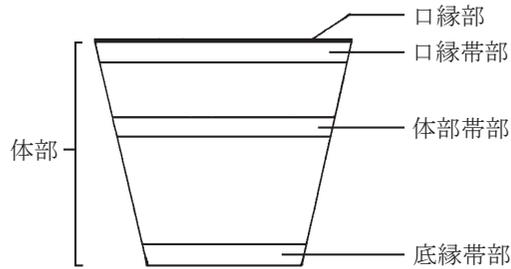


図1 かごの部位模式図 (著者作図)

## 2、編み方に関する用語

縦材：かご等の容器を想定した場合、底から立ち上げて体部形成を行う材。

横材：縦材に対し編みこむ材。

※完成形が平面の製品や、立体製品のごく一部だけ遺存している場合には、縦・横の設定は任意になる。しかし、編み方の特徴で判断できる場合もある。

巻き付け材：縦材・横材が存在するときにさらにそれらに対し編みこんでいく第3の材。縦材・横材より細く、横材に巻きつけて縦材と固定する役割を担うものが多い。

～本1単位：しばしば、何本かの材がまとめられて同じ動き（越え・潜りやもじりなど）をすることがある。この場合、同じ動きをする材が2本であれば「2本1単位」、3本であれば「3本1単位」という呼び方をする。記述がない場合は1本1単位である。

## 3、編み方の分類

木製編物の編み方は、大きく(1) 広義の網代編み(2) もじり編み(3) 六つ目編み(4) 巻き編み(5) 帯部(6) 口縁部(7) 底部、に分けられる。

### (1) 広義の網代編み

広義の網代編みは、縦材・横材が互いに越えたり潜ったりして面を形成する編み方すべてを指す。この編み方を説明するときには横材の動きに着目して記述する。横材が縦材の上を通ることを「越え」と呼び、例えば2本の縦材の上を通る場合には「2本越え」と呼ぶ。逆に横材が縦材の下を通ることを「潜り」と呼ぶ。さらに、ある横材とそれと隣り合った横材を見た時に編み目がずれることを「送り」という。例えば、図2のような編み方は「2本越え2本潜り1本送り」である。これを省略して「2:2:1」と記述することもある。

広義の網代編みの場合は、基本的にはこの「越え・潜り・送り」の数の組み合わせが変化することで編み方が異なってくる。荒木ヨシは非常に細かい分類を行ったが、その大半が広義の網代編みの「越え・潜り・送り」の違いによる分類である。しかし、この3つの数値だけでは記述できない網代編みもある。部分によって「越え・潜り・送り」が変化し、それによって規則的な文様を編み出すタイプの編み方である(図3・4)。この場合には、それぞれの場合に応じて編み方の変化を細

かく記述していくのが良いと筆者は考える。それぞれの編み方に分類番号を与えてはきりがなからである。しかし、非常によく見られるものに関しては名称を与えておくのが便利である。特に、図3の編み方は多く見られる。これは2:2:1の網代編みを基本としながら、その送りの方向を規則的に変化させて、ジグザグまたは菱形の文様を編みこんでいくものである。この編み方は編み方の分類において一般に「木目ござ目編み」と呼ばれているので、それに倣うことにする。また、1:1:1の網代編みについては材間隔によって「市松編み（縦材・横材とも幅広で編み目が詰まっている）」、「四つ目編み（縦材・横材とも材間隔が開いている）」、「ござ目（ざる目）編み（縦材の間隔が開き横材の間隔は詰まる）」に分けられることが多いが、広義には1:1:1の網代編みに分類されるものである。本論文では基本的に「広義の網代編み（これらすべてを含む）」、「○越え○潜り○送りの網代編み（編み方が変化せず一定）」、「木目ござ目編み」の呼び方を採用する。

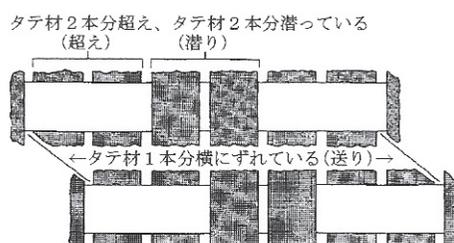


図2 越え・潜り・送り模式図

(野田 2005)

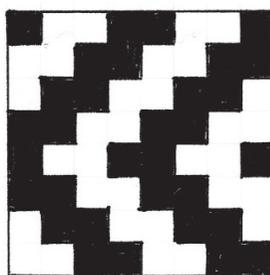


図3 木目ござ目編み

(著者作図)

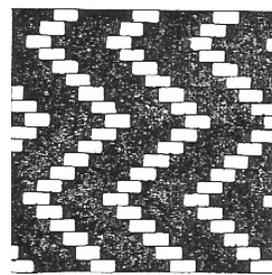


図4 網代編みの例

(荒木 1971)

## (2) もじり編み

もじり編みは、1本の横条に複数の横材を用い、複数の横材で縦材を挟むことによって面を形成する編み方である。縦材何本おきかに横材を交差させ、固定していく（図5）。この横材の動きを、縦材を「もじる」と表現することから、この編み方をもじり編みと呼ぶ。もじり編みはさらに、1本の横条に用いる横材の数と、横材が交差してからもう一度交差するまでに挟む縦材の数によって分類される。多くは2本の横材を用いて縦材1本を挟むものなので、単に「もじり編み」と呼ぶときにはこれを指す。その他の場合は「(横材)3本のもじり編み」「縦材2本を挟むもじり編み」などのように呼ぶ。

## (3) 六つ目編み

(1)(2)はともに縦材と横材の2方向の材で構成されていたが、この六つ目編みと次の巻き編みはそうではない。六つ目編みは3方向の材を組み合わせて面を形成する編み方である（図6）。図を見るのが一番わかりやすいが、野田の説明を引用すると「並行する2本のヒゴが1対となり、水平と左右斜め方向の3方向から生まれ、六角形を形成する編み方。六角形を形成するヒゴは、隣り合わせるヒゴと1本越え1本潜りを繰り返し、すべて固定されている」となる。

## (4) 巻き編み

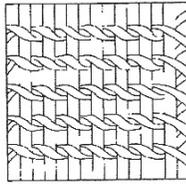


図5 もじり編み (野田 2005)

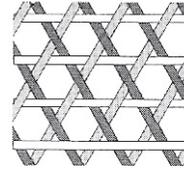


図6 六つ目編み (佐々木 2006)

これは、芯となる材を渦巻状にし、巻き付け材を螺旋状に巻いて芯材を数本（多くは2本か）ずつ固定していく編み方である。「コイリング」と呼ばれることもある。

(5) 帯部

(1)～(4)のような編み方で体部を形成するのは別に、一部分（多くは細い幅で胴部を1周する）に異なった編み方を施すことがある。これを帯部と呼ぶが、帯部の編み方には主に次の3つがある。

①体部とは異なった「越え・潜り・送り」の網代編み

②もじり編み（体部が網代編みの場合）

③横材を縦材に編みこまずに添え、巻きつけ材で縦材に固定する

①②については前述した。③は佐々木によってさらに細かく分類されている（図7）。編み方の分類では一般に「横添えもじり編み」「横添え巻き編み」と呼ばれている。①～③のいずれの場合も、帯部には体部とは異なる素材が用いられていることが多い。

(6) 口縁部

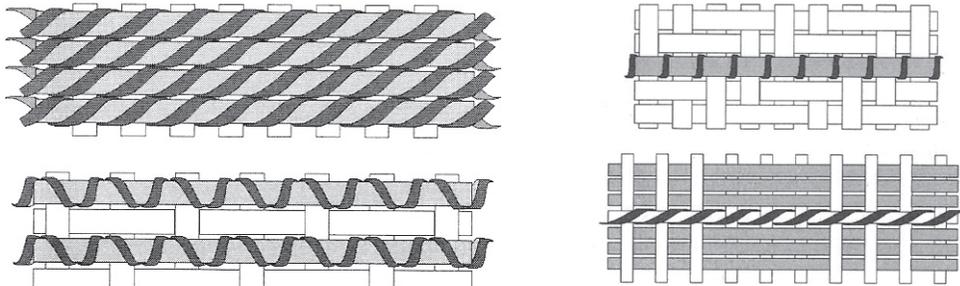


図7 巻きつけ材を使った帯部の分類 (佐々木 2006)

口縁部の形成方法はいくつか分類されているが、縄文時代のかごには口縁部が遺存しているものがあまりなく、遺存しているものも種類が少なく単純である。今後資料が増えるとともに内容も変わってくると思われるが、ここでは現時点で見られる縄文時代の口縁部処理に関係すると考えられる編み方のみを挙げておく。

①縦芯折り返し縁（縦芯材折り返み縁）

余剰の縦材を折り曲げて下方の体部に差し込み、縁の始末を行う方法。

②縄目折り返し縁

口縁部の少し下で体部にもじり編みを編みこむ。そこに余剰の縦材を折り曲げて差し込み、縁の始末を行う方法。

### ③巻縁

1本の巻き材を、余剰の縦材を芯として螺旋状に何周かめぐらせ、縦材の余剰部分を巻きつぶす方法。

### (7) 底部

底部の編み方は次の2種類が知られている。

#### ①網代底

底部も網代編みで形成し、そのまま立ちあげて体部を形成する。

#### ②菊底

芯となる材（体部の縦材となる）を放射状に置き、別の材（便宜的に横材とする）で芯材を螺旋状に編んで底部を形成する。この場合の横材の編み方は網代編みやもじり編みである。

## 第2章 考察

卒業論文では、木製編物が出土した遺跡と編物の詳細についてのデータを報告書等から収集し遺跡ごとに掲載したが、本論文では割愛する。遺存状態のよい遺跡のデータのみ、資料として最後に添付した。本論文では、収集したデータに基づいた考察を述べたい。

### 考察1 木製編物出土遺跡の概観

表2は、木製編物が出土した遺跡の一覧である。筆者が確認できただけで43遺跡ある。この他にも、「編物が出土した」という情報を文献等で得ながらも、実際に報告書を見ると編物の記載がなかった遺跡が11箇所ある<sup>1)</sup>。

木製編物の上限は、現在のところ粟津湖底遺跡の早期初頭が最も古い。それ以降は晩期終末そして弥生時代以降現在まで、用いられ続けている。上限については今後の資料の増加によりさらに遡る可能性が強い。

出土地域は、東北地方・関東地方・九州地方が多く、東海地方や近畿地方では少ない。中国地方山陽や四国地方では現在のところ出土していない。これも今後の資料の増加により変化すると考えられるが、大まかな傾向としては地域差があるのではないだろうか。東北地方の出土例が多いのは、縄文時代晩期に籃胎漆器が多く作られたためである。籃胎漆器では漆膜により内部のかごの腐食が防がれ、遺存することが多い。

出土点数は1点から200点以上（東名遺跡）まで幅が広い。これは、遺跡内で用いていた木製編物の数の違いと、遺存した製品の割合の違いによるものである。後者の影響が非常に大きいと思われる。また、状態がAランク（10点以上出土し、遺存状態が良い）<sup>2)</sup>の遺跡は6遺跡あり、これらの遺跡は出土状況なども含め総合的な編物研究が可能である。

表 2 木製編物出土遺跡一覧

番号	遺跡名	県名	市区町村	時期 1	時期 2	木製編物の種類	出土点数	状態 <sup>*)</sup>
1	住台 1 遺跡	北海道	白老町	晩期	中葉	藍胎漆器片	数点	C
2	忍路王場遺跡	北海道	小樽市	後期	中葉	木製編物・木製編物容器	210点	A
3	是川遺跡	青森県	八戸市	晩期		木製編物・藍胎漆器	約 10点	B
4	八幡崎遺跡	青森県	尾上町	晩期		藍胎漆器片	数点	C
5	亀ヶ岡遺跡	青森県	木造町	晩期		藍胎漆器	数点	C
6	三内丸山遺跡	青森県	青森市	前期	中葉	木製編物・木製編物容器	5点	B
7	是川中居遺跡	青森県	八戸市	晩期		木製編物片・藍胎漆器	6点	C
8	土井 1号遺跡	青森県	板柳町	晩期	前～中葉	藍胎漆器	16点	C
9	山玉川遺跡	宮城県	一迫町	晩期		藍胎漆器・編布	約 37点	C
10	戸平川遺跡	秋田県	秋田市	晩期	中葉	木製編物・藍胎漆器	2点	B
11	押出遺跡	山形県	高島町	前期		木製編物(編布)片	7点	C
12	荒屋敷遺跡	福島県	三島町	晩期	後葉	木製編物・木製容器	8点	B
13	明神前遺跡	栃木県	鹿沼市	後期		網代	1点	B
14	寺野東遺跡	栃木県	小山市	晩期		編物片・藍胎漆器片	十数点	C
15	寿能泥皮層遺跡	埼玉県	さいたま市(旧大宮市)	後晩期		木製編物・藍胎漆器片	5点	B
16	後谷遺跡	埼玉県	桶川市	後晩期		木製編物・藍胎漆器片など	約 5点	B
17	三ノ掛地遺跡	埼玉県	吉見町	晩期		ザル状製品	6点	B
18	北江古田遺跡	東京都	中野区	中後期		木製編物	6点	B
19	下宅部遺跡	東京都	東村山市	後期		木製編物・木製編物容器	34点以上	A
20	川崎市多摩区 No.61 遺跡	神奈川県	川崎市	後期	前半	木製編物	16点	B
21	羽根尾遺跡(羽根尾貝塚)	神奈川県	小田原市	前期		木製編物容器・木製編物片	3点	B
22	寺地遺跡	新潟県	青柳町	晩期		藍胎漆器片	数点	C
23	青田遺跡	新潟県	加治川村	晩期	終末	木製編物・木製編物容器	9点	A
24	桜町遺跡	富山県	小矢部市	中期	未葉	木製編物容器	11点(多数)	B
25	真跡遺跡	石川県	能都町	前期	後葉	木製編物容器	2点	B
26	鳥浜遺跡	福井県	三方町	前期		木製編物	58点	B
27	四方谷岩伏遺跡	福井県	鯖江市	後期	後葉	木製編物容器	3点	B
28	ヌノ下遺跡	静岡県	掛川市	後期		木製編物・貯蔵穴壁面材	43点	B
29	神郷下遺跡	愛知県	豊田市	晩期		藍胎漆器片	24点	C
30	滋賀里遺跡	滋賀県	大津市	晩期		藍胎漆器片	13点	C
31	栗津湖底遺跡	滋賀県	大津市	早期・中期		木製編物	13点	B
32	布勢第 1 遺跡	鳥取県	鳥取市	後期		木製編物容器	3点	B
33	栗谷遺跡	鳥取県	鳥取市(旧福部村)	後期		木製編物	5点	B
34	正福寺遺跡	福岡県	久留米市	後期	初頭～中葉	木製編物容器	140点	A
35	坂の下遺跡	福岡県	西有田町	後期		木製編物・木製編物容器	約 10点	B
36	東名遺跡	佐賀県	佐賀市	早期	後葉	木製編物容器	2百数十点以上	A
37	名切遺跡	長崎県	壱岐市	中期		木製編物	2点+小片	B
38	曾畑貝塚	熊本県	宇土市	前期		木製編物容器	20点	A
39	椎ノ木崎遺跡	熊本県	牛深市	後期		木製編物片	1点	C
40	龍頭遺跡	大分県	杵築市	後期	前半	木製編物容器・木製編物片	9点	B
41	横尾遺跡	大分県	大分市	早期	未葉	木製編物容器	1点	B
42	前原遺跡	沖縄県	宜野座村	中後期		木製編物	13点	B
43	伊礼原 C 遺跡	沖縄県	北谷町	前期		かご	1点?	B

## 考察2 出土状況について

表3には、木製編物の出土状況を一覧で示した。編物の出土状況は、わかっているものでは主に「貯蔵穴（土坑）内」「水場遺構内・水場遺構付近」「貝塚・捨て場」「遺物包含層・2次堆積」の4つに分かれる。

貯蔵穴内出土のものは12遺跡ある。貯蔵穴内から出土した木製編物はさらに出土の仕方によっていくつかのグループに分けられる。1つ目は貯蔵穴の底面や側面に付着して出土した例（メノト遺跡・正福寺遺跡など）である。この場合木製編物は、貯蔵穴の壁面の崩落を防ぎ、内容物をより確実に保存しておくために設置されたと考えられる。2つ目は、貯蔵穴の上面から検出された例（栗谷遺跡・四方谷岩伏遺跡など）である。この場合、木製編物は貯蔵穴の蓋の役割を果たし、内容物が風雨で失われないように保護する役割があると考えられる。これを裏付けるように木製編物の上に自然石で重しされた状態での出土例もある（栗谷遺跡）。またこのように蓋のように用いる場合、破損した木製編物を転用して用いることが多いようである。3つ目は貯蔵穴内壁・上面のどちらでもなく、貯蔵穴の覆土に含まれる例（坂の下遺跡など）である。この場合、貯蔵穴を使用し終わった段階で、破損したかごなどを廃棄する目的で埋められたと考えられる。

水場遺構とその周辺から出土したものは6遺跡ある。水場は堅果類の水さらしなど植物質の食糧や道具の加工のための施設と考えられている。その付近で出土したかごは、そのような作業に直接関わっていたことが推測される。三ノ耕地遺跡では大きいかごと小さいかごが重なるように出土しており、かごを用いた作業を具体的に復元する手がかりになる。

その他に注目すべきものとしては、墓域や、墓域に関連した捨て場からの出土である。これに当てはまるのは主に籃胎漆器であり、籃胎漆器が副葬品や葬送儀礼に用いられていたことを示唆する。

また、出土状況は地域によって偏りが見られる。貯蔵穴内から出土した例は九州地方に多い。西日本では貯蔵穴を設置する例が多いことと関連していると思われる。水場遺構からの出土は関東地方が多い。墓域や墓域に関連した場所からの出土は北海道・東北地方のみである。これは、籃胎漆器の製作と使用が、縄文晩期の北海道・東北地方で盛んだったことに起因すると考えられる。

出土状況は、遺物の用途を推定するために重要な情報である。考古学では様々な分野において遺物の形態的特徴に注目が集まり、出土状況があまり注目されないことが多い。しかし、出土状況は当時の生活のあり方を具体的に描き出すために非常に重要な情報である。その情報を積極的に公開し、また利用することが、今後の研究の発展に必要であると思う。

表 3 木製編物出土状況一覧

番号	遺跡名	県名	時期	出土状況					その他
				貯蔵穴(土坑)内	水場内・水場付近	貝塚・捨て場	包含層・2次堆積		
1	社台1遺跡	北海道	晩期						幕
2	忍路土場遺跡	北海道	後期						作業場跡
3	是川遺跡	青森県	晩期					○	不明
4	八幡崎遺跡	青森県	晩期						幕
5	亀ヶ岡遺跡	青森県	晩期					○	
6	三内丸山遺跡	青森県	前期						
7	是川中居遺跡	青森県	晩期			○			宗教的な場か
8	土井1号遺跡	青森県	晩期			○?			
9	山王廟遺跡	宮城県	晩期						不明
10	戸平川遺跡	秋田県	晩期				○(墓域に関連)		
11	押出遺跡	山形県	前期						不明
12	荒屋敷遺跡	福島県	晩期						不明
13	明神前遺跡	栃木県	晩期			○			不明
14	寺野東遺跡	栃木県	晩期			○(一部)			
15	秦能泥炭層遺跡	埼玉県	後晩期				○		
16	後合遺跡	埼玉県	後晩期					○(河道底)	
17	三ノ酢地遺跡	埼玉県	晩期			○			
18	北江古田遺跡	東京都	中後期						
19	下宅部遺跡	東京都	後期			○		○(河道)	
20	川崎市多摩区No.61遺跡	神奈川県	後期					○	
21	羽根尾貝塚	神奈川県	前期					○	積石環状配石遺構
22	寺地遺跡	新潟県	晩期						
23	青田遺跡	新潟県	晩期					○	
24	桜町遺跡	富山県	中期			○			
25	真臨遺跡	石川県	前期					○	不明
26	鳥浜遺跡	福井県	前期						
27	四方谷呂伏遺跡	福井県	後期						
28	メノ卜遺跡	静岡県	後期			○			
29	神郷下遺跡	愛知県	晩期					○	
30	滋賀里遺跡	滋賀県	晩期					○	
31	粟津湖底遺跡	滋賀県	早期・中期				○		
32	布勢第1遺跡	鳥取県	後期						不明(木組遺構か)
33	栗谷遺跡	鳥取県	後期					○(上面)	
34	正福寺遺跡	福岡県	後期					○	
35	坂の下遺跡	佐賀県	後期					○	
36	東名遺跡	佐賀県	早期					○	
37	名切遺跡	長崎県	中期					○	
38	曾畑貝塚	熊本県	前期						
39	権ノ木崎遺跡	熊本県	後期					○	
40	龍頭遺跡	大分県	後期					○	
41	横尾遺跡	大分県	早期			○			
42	前原遺跡	沖縄県	中後期						
43	伊礼原C遺跡	沖縄県	前期			○			

### 考察3 編み方について

表4と5は、木製編物の編み方の一覧である。ここでの編み方の分類は、体部の編み方は広義の網代編み（第1章第4節参照）、もじり編み、六つ目編みの3種類、底部は網代底と菊底の2種類、口縁部は折り返し縁（縦芯折り返し縁と縄目折り返し縁の両方を含む、縦材を体部の方向に折り返しているもの）と巻縁の2種類に分類した。それぞれの編み方はさらに細分することが可能だが、細分しすぎると全体の傾向がわからなくなるためこの程度の分類にとどめた。

#### A 地域による編み方の分布の偏り

表4は、遺跡を地域別に並べて編み方を示したものである。これを見ると、広義の網代編みともじり編みには、明らかに分布の偏りが見られる。特にもじり編みは、主に北陸・東海・山陰・九州で見られ、関東では1点も見られない。東北では僅かに出土する。網代編みはもじり編みに比べて偏りが少ないが、関東以北に多く見られ、関東ではすべてが網代編みである。六つ目編みや底部・口縁部の編み方は、資料数が少ないこともあるが地域的な偏りは特に認められない。また、偶然似た編み方になったのかもしれないが北海道と東北地方で1例ずつループ状の編み方が認められる。

もじり編みと網代編みの分布の偏りは何に起因するものだろうか。確かなことはわからないが、考察2で貯蔵穴からの出土が九州地方が多く、水場遺構からの出土は関東地方が多かったことと関係するのかもしれない。つまり、用途と編み方が関係を持っている可能性がある。

#### B 時期による編み方の分布の偏り

表5は、遺跡を時期別に並べて編み方を示したものである。各時期の中では前後関係は反映されておらず地域順である。これを見ると、多少の偏りが見られる。網代編みについては各時期に均等に見られるが、もじり編みはすべての時期にわたって見られるものの後期に集中している。また、早期～中期には九州と北陸でのみ見られ、後期には東海や山陰でも見られる。東北地方でもじり編みが見られるようになるのは晩期以降である。これは、遺跡自体の時期と地域の偏りによるものかもしれない（晩期には東北地方の遺跡が多く九州はない）が、現時点での出土状況ではこのような傾向がある。六つ目編みは晩期には見られない。底部の編み方は、早期～前期には網代底のみが見られ、菊底は中期以降にしか見られない。口縁部も同様で、折り返し縁は早期から見られるのに対し、巻縁の確実な例は中期以降である。

編み方の上限に着目すると、網代編みと網代底の上限は早期初頭の粟津湖底遺跡、もじり編み・六つ目編みと折り返し縁の上限は早期末葉の東名遺跡となる。東名遺跡の発見により、早期の段階から後に見られる編み方の多くが出揃っていたことが明らかになった。このことは、より前の時期から編物が多く製作され用いられてきたことを示唆する。旧石器時代に遡って編物の資料が発見される可能性が大きい。

表 4 木製編物の編み方一覧 (地域別)

番号	遺跡名	県名	地域	時期	本体部の編み方			その他	底部の編み方			口縁部の編み方		
					広義の網代編み	もじり編み	六つ目編み		網代底	菊底	その他	折り返し縁	巻縁	その他
1	社台 1 遺跡	北海道	北海道	晩明	○?									
2	怒路土場遺跡	北海道	北海道	後明										
3	是川遺跡	青森県	東北	晩明	○		ルーア状							
4	八幡崎遺跡	青森県		晩明			ルーア状							
5	亀ヶ岡遺跡	青森県		晩明			不明							
6	三内丸山遺跡	青森県		前明	○		不明							
7	是川中居遺跡	青森県		晩明	○	○?	樹添え巻き編み							
8	土井 1 号遺跡	青森県		晩明	○									
9	山王囲遺跡	宮城県		晩明			不明							
10	戸平川遺跡	秋田県		晩明	○									
11	押出遺跡	山形県		前明			不明							
12	荒居敷遺跡	福島県		晩明	○									
13	明神前遺跡	栃木県	関東	後明	○									
14	寺野真遺跡	栃木県		晩明	○									
15	寿能泥炭層遺跡	埼玉県		後晩明	○		巻きつけ材あり							
16	後谷遺跡	埼玉県		後晩明	○									
17	三ノ掛地遺跡	埼玉県		晩明	○									
18	北江古田遺跡	東京都		中後明	○									
19	下宅部遺跡	東京都		後明	○									
20	川崎市多摩区 No.61 遺跡	神奈川県		後明	○		樹添え巻き編み							
21	羽根尾貝塚	神奈川県		前明	○									
22	寺地遺跡	新潟県	北陸	晩明	○		不明							
23	青田遺跡	新潟県		晩明	○		巻きつけ材あり							
24	桜町遺跡	富山県		中期	○									
25	真駒遺跡	石川県		前明	○									
26	馬浜遺跡	福井県		前明	○									
27	四方谷岩代遺跡	福井県		後明	○		巻きつけ材あり							三つ編み
28	ヌノ下遺跡	静岡県	東海	後明	○									
29	神郷下遺跡	愛知県		晩明			不明							
30	滋賀里遺跡	滋賀県	近畿	晩明	○									
31	粟津湖底遺跡	滋賀県		早期・中期	○									
32	布勢第 1 遺跡	鳥取県	山陰	後明	○									
33	粟谷遺跡	鳥取県		後明	○									
34	正福寺遺跡	福岡県	九州	後明	○									
35	坂の下遺跡	佐賀県		後明	○		○(僅か)							
36	東名遺跡	佐賀県		後明	○									
37	名切遺跡	長崎県		早期	○									
38	曾畑貝塚	熊本県		中期	○									
39	曾畑貝塚	熊本県		前明	○									
40	龍頭遺跡	熊本県		後明	○									
41	龍頭遺跡	熊本県		後明	○		コイソング							
42	横尾遺跡	大分県		後明	○									
43	前原遺跡	大分県		早期	○									
43	伊礼原 C 遺跡	沖縄県	沖縄	中後明	○		巻きつけ材あり							○?
43	伊礼原 C 遺跡	沖縄県	沖縄	前明	○		不明							

表 5 木製編物の編み方一覧 (時期別)

番号	遺跡名	県名	時期 1	時期 2	体部の編み方					底部の編み方			口縁部の編み方		
					広義の網代編み	もじり編み	六つ目編み	その他	網代底	菊底	その他	折り返し縁	巻縁	その他	
31	粟津湖底遺跡	滋賀県	早期・中期	早期初頭・中期前葉	○					○					
36	東名遺跡	佐賀県	早期	後葉		○									
41	磯尾遺跡	大分県	早期	未葉											
6	三内丸山遺跡	青森県	前期	中葉	○										
11	押出遺跡	山形県	前期											○?	
21	羽根尾貝塚	神奈川県	前期												
25	真脇遺跡	石川県	前期	後葉											
26	鳥浜遺跡	福井県	前期					○?							
38	曾和貝塚	熊本県	前期												
43	伊丸原 C 遺跡	沖縄県	前期						不明						
24	桜町遺跡	富山県	中期	未葉						○					○
37	名切遺跡	長崎県	中期												
18	北江古田遺跡	東京都	中後期												○
42	前原遺跡	沖縄県	中後期												○?
2	忍路土場遺跡	北海道	後期	中葉											
13	明神前遺跡	栃木県	後期						ルーフ状						
19	下宅部遺跡	東京都	後期												
20	川崎市多摩区 No.61 遺跡	神奈川県	後期	前半											
27	四方谷岩伏遺跡	福井県	後期	後葉											
28	スノト遺跡	静岡県	後期												
32	布勢第 1 遺跡	鳥取県	後期												
33	栗合遺跡	鳥取県	後期												
34	正福寺遺跡	福岡県	後期	初頭～中葉											
35	坂の下遺跡	佐賀県	後期												
39	椎ノ木崎遺跡	熊本県	後期												
40	龍頭遺跡	大分県	後期	前半											
15	寿能泥炭層遺跡	埼玉県	後晩期												
16	後合遺跡	埼玉県	後晩期												
1	社台 1 遺跡	北海道	晩期	中葉											
3	是川遺跡	青森県	晩期												
4	八幡崎遺跡	青森県	晩期												
5	龜ヶ岡遺跡	青森県	晩期												
7	是川中居遺跡	青森県	晩期	前～中葉											
8	上井 1 号遺跡	青森県	晩期												
9	山玉川遺跡	宮城県	晩期												
10	戸平川遺跡	秋田県	晩期	中葉											
12	荒屋敷遺跡	福島県	晩期	後葉											
14	寺野東遺跡	栃木県	晩期												
17	三ノ軒地遺跡	埼玉県	晩期												
22	寺地遺跡	新潟県	晩期						不明						
23	青田遺跡	新潟県	晩期	終末											○
29	神郷下遺跡	愛知県	晩期												
30	滋賀里遺跡	滋賀県	晩期						不明						

## 第4章 東名遺跡出土のかごについて

### 第1節 東名遺跡出土の編物の調査の報告と編物の概要

本論文の編物出土遺跡番号 36、佐賀県佐賀市の東名遺跡では、遺存状態の良好な編物が大量に出土している。筆者は様々の方のご好意により、2006年3月に発掘調査に参加させていただき、また6月と10月に編物の調査に伺わせていただいた。その経験と調査結果をもとに、東名遺跡出土の編物について若干の考察を行いたい。

編物の調査の目的と方法は以下のようなものである。出土した編物はそのままでは徐々に劣化してしまうため、保存処理を行うことが決まっていた。しかし、保存処理を施すと、素材の収縮や質の変化などにより編物の形状が多少変化してしまうことが予想され、編み方の詳細な観察ができなくなる恐れがある。また、素材の樹種同定を行うためのサンプルの採取が不可能となる。そこで、保存処理を施す前に、編物の細かい形状の記録やサンプルの採取を行うことが計画された。保存処理の対象となる編物は、出土した多数の編物の中でも特に遺存状態の良いものや特色を備えたものであるため、これらの編物の詳細な観察を行うことは非常に有益であると思われる。

調査では、編物の器種や編み方、また素材の幅や性質などの記録を行い、部材ごとに樹種同定用のサンプルの採取を行った。現在(2006年12月)までに約65点が保存処理に出されており、それらについての調査が行われた。調査の日程と調査点数(編物に限る)・参加者は以下の通りである。

第1回調査 2006年6月7日・8日

調査点数：47点

調査者：佐々木由香(パレオ・ラボ)、能城修一(森林総合研究所)、熊代昌之(福岡県久留米市文化財保護課)、山田広幸(奈良大学)、柳原梢子

第2回調査 2006年9月22日

調査点数：9点

調査者：佐々木

第3回調査 2006年10月26日・27日

調査点数：8点

調査者：佐々木・能城・熊代・今田秀樹(大分県日田市教育委員会)・柳原

調査の結果、東名遺跡出土の編物にはかご(編物容器)と推定できるものが多いことがわかった。また編み方は、多くが2:2:1の様な網代編みで、次にそれに变化を加えて送りを左右に変化させていく編み方(木目ごぎ目編み)や1:1:1の網代編みが多い。そして少数ではあるが、六つ目編みやもじり編みのかごが出土していることが注目される。第2節の考察ではそれぞれの編み方を用いたかごの典型的な例をいくつか挙げ、東名遺跡で用いられていたかごの様相を示したい。

## 第2節 考察

### 考察1 東名遺跡出土の編物の種類

#### 1 全体の形と大きさ

東名遺跡出土の木製編物は、ほとんどがその一部が遺存したものであり、かろうじてかご（立体の容器）と推定できるものは多いが全体の器形や法量を推定できるものは少ない。しかし全体形が推定できるものも数点出土しているので、それらを紹介する。



図8 AM2072（佐賀市教育委員会 2006）

図8は遺物番号AM2072のかごで、全長約80cmである。概報に掲載されていたもので、写真からは編み方などはわからない。体部上部に帯部が2本確認できる。器形は、体部下部で最大径を持つが、口縁部に向かう幅の狭まり方は一様で特に首のような部分は形成していない。



図9 SK2138 アミ2（調査時撮影）

図9は、遺物番号SK2138 アミ2のかごである。写真右側に底部が折り重なっており、口縁部は欠損しているが、全長はおよそ80cmと考えられる。この製品も体部下部に最大径を持つが、体部上部で急に幅を狭めて首を持つような器形になっている。編み方は木目ご目編みで、帯部より上は1:1:1の網代編みとなっている。帯部と器形や編み方の関係は考察2で扱う。

以上、全形が推定できる2点を挙げたが、部分が遺存している物についてもこのような器形を持つ容器の部分と考えられるものが多い。東名遺跡で多数出土している木製編物の多くはこのような、幅50cm程度、長さ80cm程度の縦に長いかごで、底部から立ち上がった体部下部に最大径を持ち、口縁部に向かって幅を狭めていくような形のかごであったと考えられる。

## 2 編み方

東名遺跡出土の木製編物の編み方は広義の網代編みがほとんどを占め、中でも2越え2潜り1送りの網代編みが最も多い。次いでそれを左右に反転させることを繰り返す編み方(木目ご目編み)が多いが、この2つの編み方は遺存状態や調査者の経験値によっては見分けることが困難なため、一括して扱う。実際に、第1回調査で2:2:1の網代編みとしたものが、後に図面や写真を見直すと木目ご目編みであったという例が多い。これは、木目ご目編みの製品の一部のみを取り出してみると2:2:1の網代編みであるからである。他には1越え1潜り1送りの最も単純な網代編みが多い。そして少数ではあるが、六つ目編みともじり編みのかごも出土している。以下ではそれぞれの典型となる製品を紹介する。

### ①広義の網代編み

#### (1)2越え2潜り1送りの網代編み、および木目ご目編み

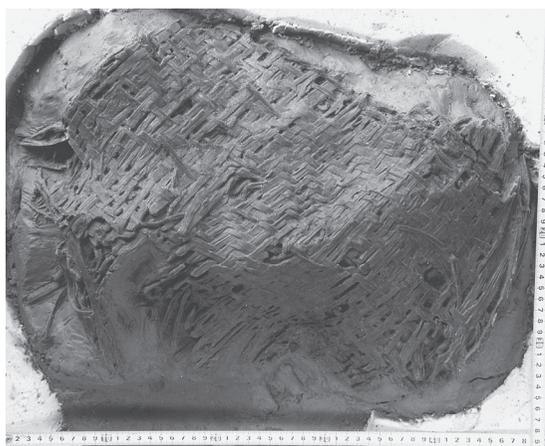


図10 AM2055 遺存部全体

(佐賀市教育委員会文化財課提供 [以下、「佐賀市」とする])



図11 網代編み部拡大 (佐賀市)

AM2055(図10・11)は、かごの体部と考えられる製品である。編み方は木目ごぎ目編み。幅は45cmほど。底部・口縁部は欠損。写真の上端部にもじり編み2段の帯部が見られる。1本の幅約6.5mmの平たく割り裂いた材を隙間なく編んでいる。このようなかごが最も多く見られ、1で紹介した全形が推定できる3点のかごもこの種類のものである。

AM2128 下半(図12・13)も、網代編みのかごの一部である。この製品は、縦材に3.5mm程度の幅の植物繊維を丸のまま用いていることに特徴がある。横材の木取りは不明だが、4.5mm程度の幅の厚みを持った素材を使用している。それぞれの材が厚いため表面に凹凸があり、また材同士の間隔が少し開いていて、平たく割り裂いた材を用いたかごとは雰囲気が異なる。

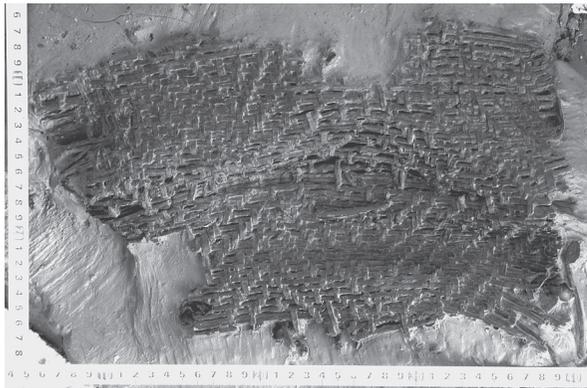


図12 AM2128 下半 遺存部全体 (佐賀市)

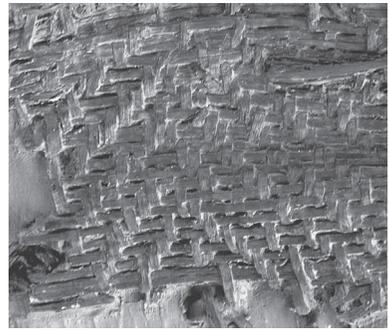


図13 網代編み部拡大 (佐賀市)

(2)1 越え1 潜り1 送りの網代編み



図14 SK2052 (佐賀市)

図14はSK2052で、器形は不明。(1)の1つ目の例と同様に、平たく割り裂いた材を編んでいる。

この製品では材間隔は少し開くが、まったく開かないものや広く開くものもある。最も単純な編み方だが出土例はあまり多くない。後で述べるが、ひとつの製品の中で部分的にこの編み方を用いることがあり、この例も製品の一部かもしれない。全形が推定できる形で出土したかごには、この編み方を全面に使用したものはほとんど見られない。

②六つ目編み

東名遺跡では、六つ目編みの木製編物は2006年3月までで3点出土している。そのうち2点を紹介する。

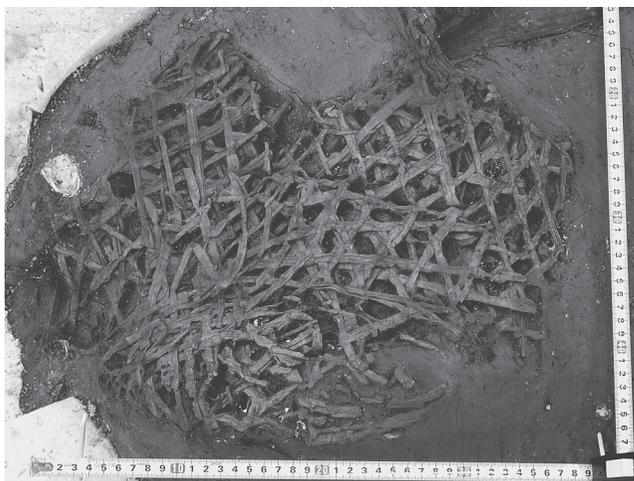


図15 AM2080-2 遺存部全体 (佐賀市)

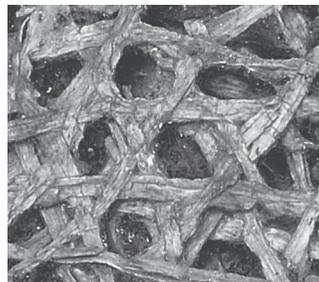


図16 六つ目編み部拡大 (佐賀市)

AM2080-2はおそらくかごの体部。写真下方にあるのが網代編み(2:2:1)の底部と考えられる。



図17 AM2123 (佐賀市)

AM2123。写真左側に網代編みの底部がある。器形はよくわからないが、体部に比べて底部が小さいように見えるので、1で全形を示した網代編みのものと似たような器形を持つ製品かもしれない。

### ③もじり編み

東名遺跡では、もじり編みは網代編みのかごの中に数段編みこまれ、帯部として用いられていることが多い。数点のみ、もじり編みによって器面を形成しているものがある。

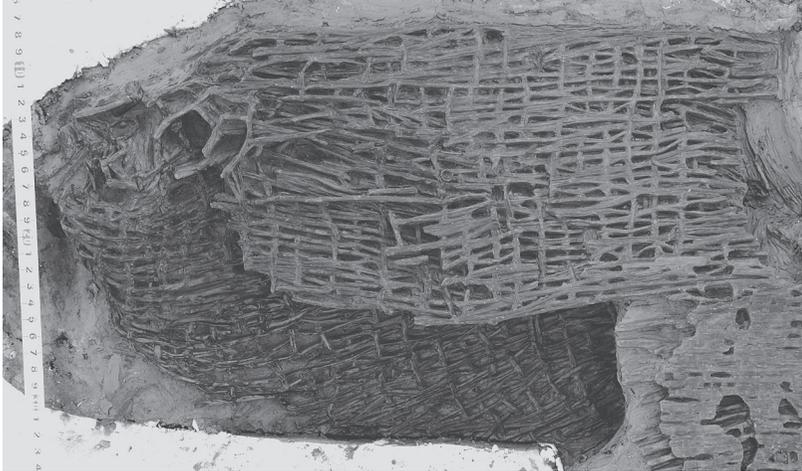


図 18 AM2078 遺存部全体 (調査時撮影)

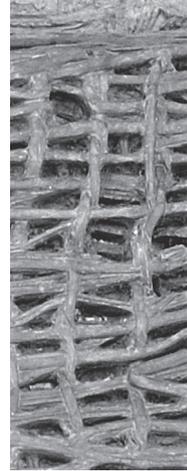


図 19 もじり編み部拡大 (同左)

AM2078 は、編み方から、写真の左右の方向をかごの縦方向、上下の方向を横方向と考えている。口縁部・底部はともに欠損で遺存部はおそらく体部。縦に折れ曲がっていると考え、遺存している部分のかごの幅は 40～50cm くらいであろうか。縦材は幅 3mm ほどで、素材には半割りにした植物を、横材は幅 2mm ほどで、丸のままの植物を用いている。

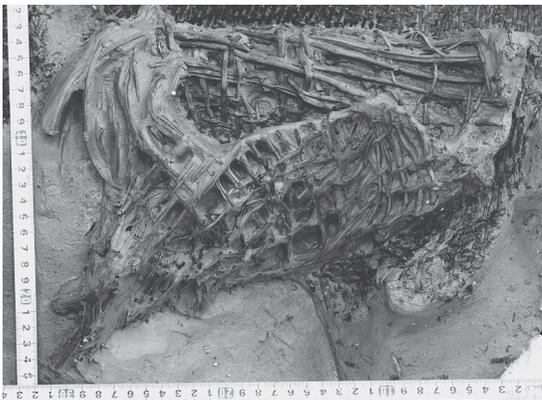


図 20 AM2183 遺存部全体



図 21 もじり編み部拡大 (佐賀市)

AM2183. おそらく体部だが器形は不明。縦材は幅 4mm ほどで、素材には丸または半割りの植物を、横材は幅 2～3mm で丸の植物を用いている。縦材が不規則で、1本1単位と2本1単位のところがある。後に紹介する X 字の編み方かもしれない。

④その他の特色ある編み方

上で紹介した編み方の他にも、特色ある編み方がいくつか見られるので紹介する。

(1) 異なる素材を編みこむ



図 22 AM2062 遺存部全体 (佐賀市)



図 23 異素材部拡大 (佐賀市)

AM2062 は、器形は不明だがおそらく体部だと思われる。縦材・横材ともに、基本となる褐色（現時点での色調）の材の中に黒褐色（現時点での色調）の材を編みこんでいる。黒褐色の材の方が少し幅が広い。編みこみ方は、褐色の材と黒褐色の材を2本1単位にして編んでいる部分が多く見られる。補強のためか、装飾的な目的かはわからない。



図 24 AM2200 (調査時撮影)

AM2200 は、口縁部～体部が遺存。体部の幅は40～50cm程度と考えられる。約10cm間隔で縦材に黒褐色（現時点での色調）が入る。おそらく帯部と同材である。

この製品のように縦材に部分的に異素材（色調の異なる材や樹皮など）を編みこむ例はいくつか確認されている。

## (2) 縦材をX字に編む



図 25 AM2146 遺存部全体（調査時撮影）



図 26 X字編み部拡大（同左）

AM2146 は、口縁部と体部の一部が遺存している。体部は、縦材に横材より細い材を用い、縦材の間隔が開く網代編みであるが、縦材が隣り合う縦材同士でくっついたり離れたりを繰り返しているように見える。しかしあまり遺存状態がよくないため、単純な2本1単位の縦材が崩れてしまっているだけかもしれない。調査時の実物の観察では、縦材同士がX字を書くように編まれているように見えた。

以上、東名遺跡で見られた様々な編み方の木製編物（おそらくほとんどがかご）を見てきたが、ほとんどがほぼ同幅の割り裂き材を用いて広義の網代編みで編まれている。編み方も明確な精粗の差はないと思われ、非常に丁寧に作られている。かなり規格化されたかご製作技法が成立していたという印象を受ける。

また、このようにほとんどが網代編みで編まれている中で、六つ目編みやもじり編みのかごがどのような位置づけにあったのかが興味深い。現段階では使い分けの有無などはわからないが、全体形がわかるものが出土すれば器形との関係で検討ができるかもしれない。また今回はできなかったが、出土位置や出土状況との関係も検討が必要である。

## 考察2 帯部について

東名遺跡から出土した木製編物の中には、地となる編み方に部分的に異なる編み方を編みこんだものが多くある。その多くがかごの横方向に沿って器面を1周するように取り巻いていることから、この異なった編み方の部分を「帯部」と呼んでいる。帯部には、多くは体部とは違う素材が用いられている。帯部の目的については補強材とする考え方が主だが、飾りとしての目的もあると考えられている。

東名遺跡から出土した木製編物の帯部には、主に次のようなものが認められる。

- (1) 口縁部直下にもじり編み・体部と異なる網代編み・そのほかの編み方を何段か編みこんだもの
- (2) 体部に (1) と同様の編み方を何段か編みこんだもの
- (3) 体部上部～口縁部にかけてパターン化した文様構成を持つもの

このうち (1) (2) については補強材の役割が大きいと考えられるが、(3) は補強材としての目的の他に、ある定型的な文様構成を持ったかごを意図的に製作し、何らかの意味を持たせていたことが考えられる。各帯部構成について以下に詳しく見ていきたい。なお、上記の他にも底部の帯部と考えられるものなども見られるが、遺存状況が悪く検討できないため扱わない。また、体部の帯部は上部・中央・下部のものがあるが、部位が特定できないものも多いので一括して扱う。

(1) 口縁部直下の帯部

図 27 は 口 縁 部 直 下 の 帯 部 で 、 構 成



図 27 AM2061 部分 (佐賀市)

は、上から<横添え巻き編み1段+もじり編み1段+横添え巻き編み1段+もじり編み5段>となっている。おそらく口縁部は丈夫に作る必要があるため、補強のための帯部であると考えられる。特に横添え巻き編みはやや太めの材を口縁直下に回し巻き材で固定するもので、補強の効果が大きいと思われる。口縁部は、余った縦材を表側に折り返して帯部より上の体部に編みこんでいる。縦材の先端は帯部の最上段に挟み込まれているように見える。



図 28 A22476 部分 (調査時撮影)

図 28 も口縁直下の帯部で、構成は上から<もじり編み2段+(少し間を空けて)1:1:1×2×2単位>となっている。

図 29 も口縁直下の帯部。構成はもじり編み2段。口縁部は、AM2061 と同様に、余った縦材を表側に折り返して体部に編み、先端は帯部に挟み込んでいる。



図 29 AM2126 (調査時撮影)

いずれも、口縁部直下の帯部は口縁部の補強の目的と縦材の処理に関連して施されていると考えられる。

## (2) 体部の帯部

図 30 の製品は体部に 1 段のもじり編みがある。このもじり編みより下は、縦材・横材とも 1 本 1 単位の 2:2:1 の網代編みだが、帯部より上は縦材が 2 本 1 単位の 1:1:1 の網代編みになっている。良く見るとちょうど帯部の位置で縦材が 2 本重なっており、この位置でかごの横幅が急に狭まっている。この製品では、帯部は器形の変化に関わっていると考えられる。おそらく胴幅が変わるところには力がかかるため、補強の目的があると考えられる。

同様に縦材が 1 本 1 単位から 2 本 1 単位に変化する例はいくつかあるが、必ずしも帯部を境にしているわけではない。しかし変化点の近くに帯部がある場合が多いように思う。

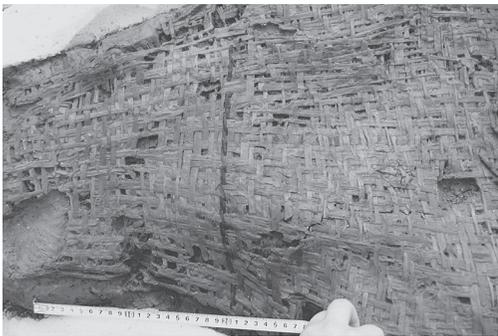


図 30 SK2138 アミ 2 (調査時撮影)



図 31 AM1007 (同左)

図 31 の製品は体部上部が細く折れ曲がっているためわかりにくいですが、体部上部に帯部を持っている。帯部の少し下で縦材が重なって条数を減らしている。実際の器形は製品が折れ曲がっているためよくわからないが、おそらく縦材の収斂により胴幅が狭まっていると考えられる。帯部の構成は上から  $< 1:1:1 \times 2 + 1:1:1 \times 2 + 3:3:1 \text{ (部分的に } 1:1:1) \times 10 >$  となっており、かなりしっかりとした補強が行われていることがわかる。この製品は全体として、製品下方から  $< 2:2:1$  の網代編み。編み目が粗く素材も太め→上方に行くに従い目が詰まり素材も細くなる→2 本 1 単位で  $1:1:1$  の網代編み  $>$  となっており、かごの幅を縮めていると考えられる。

結論として、体部に施された帯部は器形変化に対する補強の目的を持ったものもあると考えられる。その他にも、単純に大径になった胴部を維持するために施されるものもあると考えられるが、いずれにしても補強の目的が大きいようである。

(3) パターン化した文様構成を持つもの

第3回の調査では、定型的な飾りと考えられる帯部がおそらく3点(1点は不確実)みられた。そのうちの2点を紹介する。

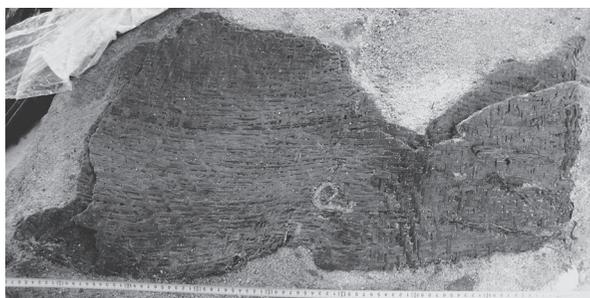


図 32 AM2271 遺存部全体 (調査時撮影)



図 33 帯部拡大 (同左)

AM2271 は、口縁部～体部上部に広く帯部が施されている。帯部の構成は、上からくもじり編み1段+縦方向の材(幅3mmほどの材をきつくもじる)+3:2:1×8>となっている。一番上のもじり編み1段は、口縁部で余った縦材を表に折り返した後に縦材の先端が差し込まれているので、口縁部の形成に関連して、また口縁部の補強として施されたものと考えられる。下の網代編み8段は補強のためと考えられるが、周辺で縦材の収斂などは見られない。間の縦方向の材は数箇所しか体部に編みこまれておらずほとんどがかごの外面向にくっついている状態のため、補強の役割を果たしているとは考えられない。これは飾りの要素が強いと思われる。外側から何かを挟んだり持ったりする取手のようなものの可能性もあるが、狭い間隔で何本も施されているので取手ではなさそうである。帯部にはすべて黒褐色(現時点での色調)の材を用いている。遺存部で長さが80cm程あり、大型のかごと推定される。

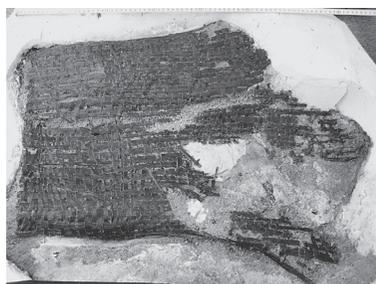


図 34 AM2272 遺存部全体 (調査時撮影)



図 35 帯部拡大 (同左)

AM2272 も AM2271 と同様に口縁部～体部上部に広く帯部が施されている。帯部の構成は上からくもじり編み1段+縦方向の材(2本の材を緩やかにもじる)+2～3cmの間隔をあけてもじり編み(または1越え1潜りの材)3段>となっている。AM2271と同様に1番上の帯部には口縁部で折り返した縦材の先端が挟み込まれている。縦方向の材は約8cmの間隔を置いて5単位認められる。おそらくループ状に互いにつながっているように観察され、下方は体部に編みこまれている。帯部は体部より細い黒褐色の材で編まれている。また、一番下の帯部付近を境に縦材が1本1単位から2本1単位に変化し、編み方も2:2:1の網代編みから1:1:1の網代編みに変化している。やはりこの部分の帯部は、器形変化の補強のために施されていると考えられる。遺存部だけで70cm程あるので、これも大型のかごと考えられる。

以上見てきたようにAM2271とAM2272の帯部は共通部分が多い。いずれも、口縁部～体部上部に<口縁部形成用のもじり編み1段+間隔を置いておそらく全周をとりまく縦方向の材+胴部補強用の網代編みまたはもじり編み数段>という構成の広い帯部を持つ大型のかごである。口縁部と帯部下段の部分は口縁部形成や補強のためと考えられるが、縦の材は飾りである可能性が高い。また、AM2271とAM2272、そして同様の縦方向の材を帯部に持つと思われるAM1004の3個体のかごは数m程離れるが近くから出土し、いずれも砂地から出土したそうである。これらのかごは何らかの特別な用途のために作られた物かもしれないことをうかがわせる。

## おわりに

本論文と、その元になった卒業論文を執筆するにあたり多くの方々にお世話になった。辻誠一郎先生には論文構想段階でご助言をいただいた。編物の調査では佐々木由香さん、熊代昌之さん、能城修一さん、山田広幸さんに調査方法の基本から編物研究の魅力まで多くのことを教わった。東名遺跡の現場や編物調査では西田巖さん、中野充さん、山崎真治さん、大島さん、作業員の皆さんなど大変多くの方にお世話になった。お忙しい中卒業論文に目を通してくださり貴重なご助言を頂いた名久井文明先生にも深く感謝を申し上げます。その他にも多くの方にご助力いただきました。皆さんありがとうございました。

資料（Aランクの遺跡データ）

凡例・・・以下の項目について記載した。

編物出土遺跡番号：北海道から沖縄まで都道府県順。同都道府県内は報告書発刊年順。

遺跡名

<所在地>：遺跡が存在する市区町村（できれば番地まで）

<立地>：遺跡の立地を簡単に説明

<遺跡の性格>：遺跡の時期と内容

※長期にわたる遺跡の場合、原則として縄文時代についてのみ記載

<木製編物について>

▽出土点数

▽時期：編物が属する時期

▽出土状況：編物の出土状況

▽詳細：各編物について、または全体的な傾向について記載

※基本的には報告書の説明をまとめて記述したが、調査者の報告と筆者の見解が異なるものは修正し、報告がない編物についても写真や図面から判断して記述した。用語や名称は原則的には報告書で用いられているものを踏襲し、不相当と感じたもののみ適当な用語に置き換えた。

▽状態：以下の3ランクに分類

A：木製編物が10点以上出土し、編み方や出土状況などが明確なもの

→編み方・出土状況・遺跡内での比較など総合的な研究対象になる遺跡

B：木製編物が10点以下出土し、編み方が明確であったり特徴があるもの

10点以上の出土でも、遺存状況が悪くAランクに分類されないもの

→編物そのものの分析は十分可能な遺跡

C：編み方が明瞭でなく、あまり検討の余地がないもの

<関連遺物><関連遺構>

：木製編物に関連すると思われる出土遺物・遺構の簡単な説明

遺跡番号 2 忍路土場遺跡

<所在地>北海道小樽市

<立地>台地縁辺と氾濫原

<遺跡の性格>縄文時代後期中葉の住居址・作業場跡

<木製編物について>

▽出土数：210点(54件)

▽時期：後期中葉(鮫澗式期)

▽出土状況：作業場(食物加工場?)跡からの出土が多い。特に木組遺構(作業台?)周辺に集中。

▽詳細

・平面形製品

(網代編み)

最も多く24件。編み方は6:6:6(材幅平均0.38cm)と8:8:8(材幅平均0.3cm)のものが網代編み製品の75%を占める。そのほかに4:4:4や1:1:1、2:2:1や1:2:2などの網代編みも見られるが、遺存状態があまりよくない。材間隔はほとんどなく、密接して編まれている。縦横のほかに斜め方向に材を編んでいるものもある。重なって出土しているものや他のものに付着しているものも見られる。比較的大きく広がった出土状況を示すため、敷物として用いられたと考えられる。直上・直下・周囲に堅果類が出土している。

(すだれ状)

14件出土。材料から2種類に分けられる。1つは、表面にすじの入った、断面が平でやわらかい材質のもので、ただ並べただけで編んでいない製品が多い。もう1つは、断面が楕円形の木の小枝か、つるをそのまま利用したもの。材を並べたあと、斜め方向に別材を1~数本ざっくりと組んでいる。

・ざる、かご状製品

8件出土。六つ目編みが主。他に、箕の頭部と思われる3:3:1の網代編みの部分が出土している。木の実が付着しているものもある。縦材に横材をループ状に巻きつけて編んだものも数点見られる。

(関連遺物)

このほかに、編布や縄が多数出土している。

▽状態

A

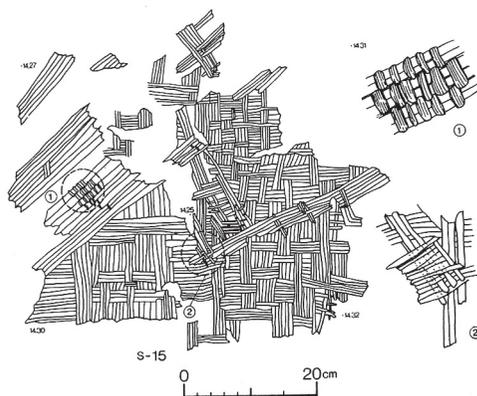


図 36 平面形製品(網代編み) S-15 実測図  
(北海道埋蔵文化財センター 1898)

遺跡番号 19 下宅部遺跡

<所在地>東京都東村山市多摩湖町4丁目3・4番地およびその周辺

<立地>北川北岸。小さな谷とその周辺部。当時は谷は水流を伴っていたことが確認されており、遺跡はこの小支流と旧北川の合流点に立地。

<遺跡の性格>縄文時代後晩期の低湿地遺跡。集落付随の作業空間と考えられる。

<木製編物について>

▽出土数：49点

▽時期：縄文後期（～晩期前葉）

▽出土状況：合流点の河道、水場遺構等より出土。漁業や堅果類の水さらし作業に関わるものと推定されている。

▽詳細

器種は、判明しているものはかご（ざる）・釜・筵の三種。

編み方は広義の網代編みが多く、越え・潜り・送りは1:1:1、2:2:1、3:3:1などがある。そのほかにも六つ目編みや、もじり編み・横添えもじり編みの帯部などが見られる。底部は網代底である。口縁部は巻縁・矢筈巻縁・縄目返し縁が確認されている。

素材は、タケ亜科の割り裂き材が多く見られる。

▽状態

A

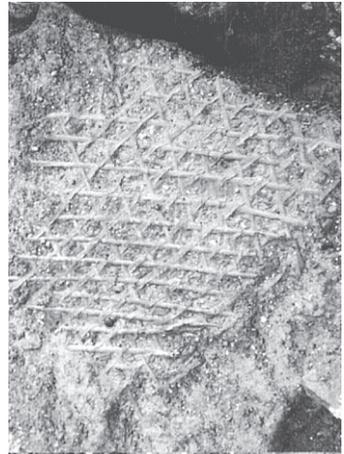


図37 網代編み(第1号網代) 図38 横添えもじり編み(第8号) 図39 六つ目編み(第17号)  
(図の出典はすべて、下宅部遺跡調査団 2000)

遺跡番号 24 桜町遺跡

<所在地> 富山県小矢部市桜町

<立地> 内陸部丘陵地の小さな谷あい。小矢部川と子撫川の合流部西側

<遺跡の性格> 前期～晩期の集落遺跡

<木製編物について>

▽出土数：多数。報告があるのは11点。かご・ザル・ウケなど

▽時期：中期末葉

▽出土状況：水場とその周辺

▽詳細

かご・ザル・ウケなどの編物類。編み方はもじり編みと網代編み（幅広の素材で2:2:1、細い素材で1:1:1など）が見られる。もじり編みのものは編み目の粗いものが多い。口縁部が巻き縁であることが注目される。口縁部に複数本平行した巻き縁を形成したのかもしれない。底部は網代底と菊底の両方が見られる。

網代編みのかごが水場の中に掘りくぼめた浅い穴に埋められた状態で出土

→各種のかごが、木の実の採集や虫出し・灰汁抜きといった作業に使用されていたものと考えられる。

▽状態：A

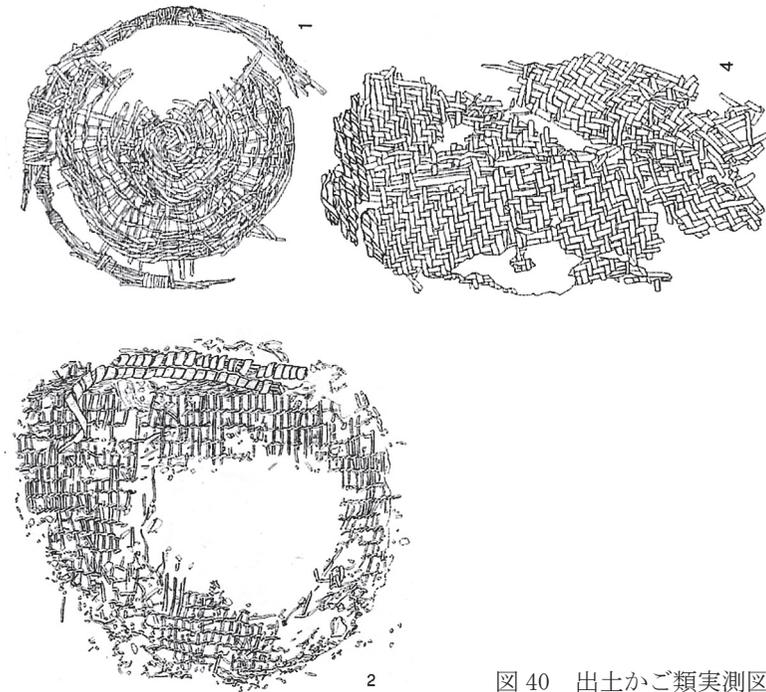


図 40 出土かご類実測図（小矢部市教育委員会 2004）

遺跡番号 34 正福寺遺跡

<所在地> 福岡県久留米市国分町

<立地> 耳納山系西麓から派生する扇状地末端部。標高約 30m。湧水により解析された谷が北流し根入川に合流する地点に立地。

<遺跡の性格> 縄文時代後期初頭～中葉の土坑群

<編物について>

▽出土数：140 点

▽時期：縄文後期初頭～中葉

▽出土状況：土坑内から出土。壁面や底面に貼り付けられたものや、土坑上部から検出されたものもある。

▽詳細

ほぼすべてがもじり編みのかごか袋で、網代編みは 2 点のみ出土。大きく、高さ 15cm ほどの小ぶりなものと高さ 50cm ほどの大型品に分類できる。素材は、現在のところテイカカズラ属とウドカズラ属の 2 種類のみ。遺物を実見する機会を得たので、特徴的ないくつかの資料について紹介する。資料はすべて、久留米市埋蔵文化財センター所蔵。写真はすべて、調査時に撮影。

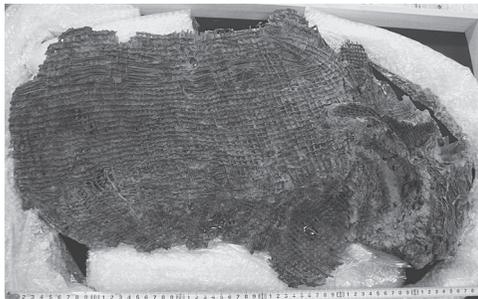


図 41 SK73 アミ 1 全体



図 42 帯部拡大

大型のかご。帯部がこの遺跡の典型例である。もじり編みの体部に、一定区間編まずに材を表側に回し、縦材数本分は縦材の下（かごの内側）をくぐらせる。



図 43 SK49 アミ 1

かごの口縁部に取手がつき、口縁部から上にドングリが大量にある。



図 44 SK73 アミ 2



図 45 K9 グリッドアミ 25

図 44 は SK73 アミ 2 の底部。菊底のもじり編みの底部に、補強材を数本ランダムに入れている。  
図 45 は 2 ～ 4 本 1 単位の四つ目底。

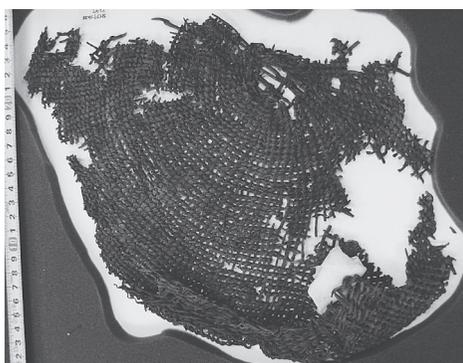


図 46 SK88 アミ 47

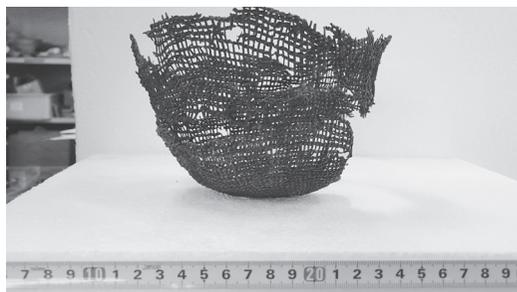


図 47 SK49 アミ 2

図 46 は典型的な小型のかご。緻密なもじり編みで、器高 20cm ほど。

図 47 は立体復元された小型のかご。

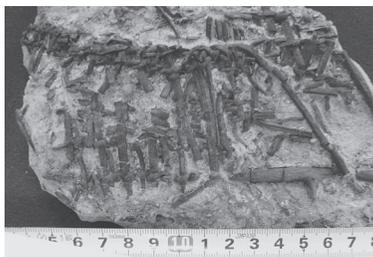


図 48 J8 グリッドアミ



図 49 SK88 アミ 132

図 48 はもじり編み 2 段の縄目折り返し縁。図 49 は石斧を包んでいたかご。



図50 SK88 全体図



図51 網代編み部拡大



図52 横添えもじりアミ部拡大

全体は網代編み。横添えもじり編みの帯部あり。

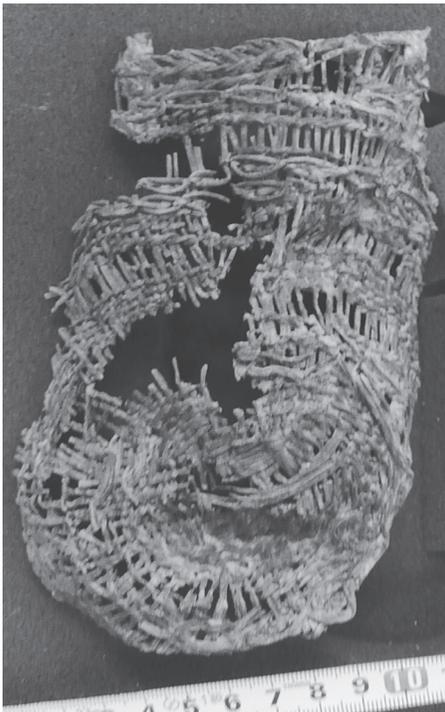


図 53 H6 グリッドアミ2

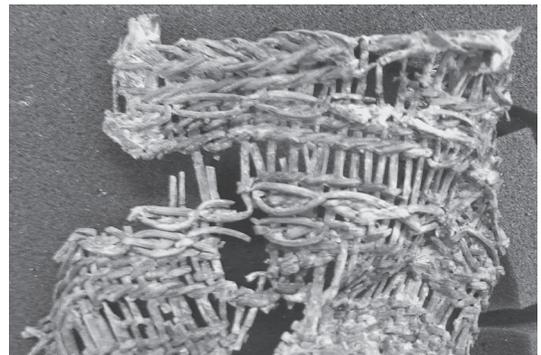


図 54 帯部拡大

チェーン状の帯部がある小型のかご。このチェーン状の帯部は、補強のためではなく純粋に飾りと考えられる。

▽状態：A

遺跡番号 38 曾畑貝塚

<所在地> 熊本県宇土市岩古曾北原ほか

<立地> 宇土半島基部の、大規模貝塚が点在する地区。曾畑貝塚は雁回山から伸びた舌状台地の末端部

<遺跡の詳細> 縄文時代前期中心の西貝塚と後期中心の東貝塚

<木製編物について>

▽出土数：20 点

▽時期：貯蔵穴検出面は曾畑式土器（前期）の時期に比定

▽出土状況

貝塚本体から約 100 m 離れた低地部：イチイガシ等が残る貯蔵穴 62 基  
貯蔵穴に 20 点の網代が残存。

貝類の廃棄場所と食物の貯蔵場所を明確に区別している。

▽詳細

文献②記載の図面より

口径 30 ~ 40cm ほどの浅いかご。体部は 2 : 2 : 1 などの網代編み。材間隔は少し開く。底部は網代底。2 本 1 単位の 4 : 4 : 2 か。口縁部は縦材を折り返して体部に差し込んでいる。

▽状態

A

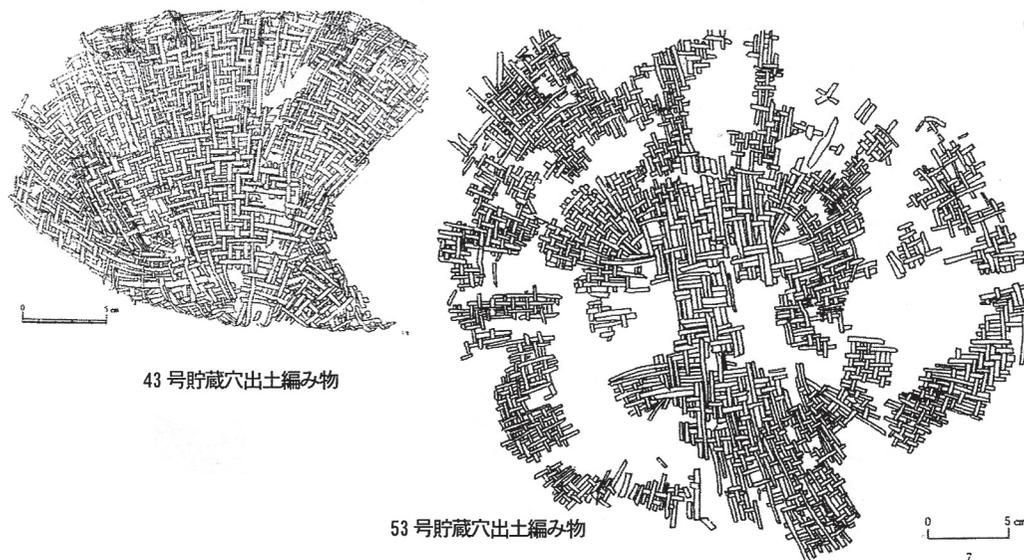


図 55 出土かご実測図（九州縄文研究会 2006）

〈註〉

- 1) 次の遺跡は、報告書で編物の記述が確認できなかった。報告書の年次等を変えて再度確認しようと思っている。北海道：柏木B遺跡・朱円遺跡・美沢1遺跡、青森県：石郷遺跡（平賀町）・福泉遺跡（五所川原市）、宮城県：根岸遺跡（岩出山町）、秋田県：中山遺跡（五城目町）、埼玉県：真福寺遺跡（岩槻市）、石川県：中屋サワ遺跡（金沢市）、滋賀県：筑摩佃遺跡（米原町）、鳥取県：桂見遺跡（鳥取市）
- 2) 卒業論文のデータ集成では、遺跡の状態をA～Cの3ランクに分類した。各ランクの基準は次のように設定した。
  - Aランク：木製編物が10点以上出土し、編み方や出土状況などが明確なもの  
→編み方・出土状況・遺跡内での比較など総合的な研究対象になる遺跡
  - Bランク：木製編物が10点以下出土し、編み方が明確であったり特徴があるもの  
10点以上の出土でも、遺存状況が悪くAランクに分類されないもの  
→編物そのものの分析は十分可能な遺跡
  - Cランク：編み方が明瞭でなく、あまり検討の余地がないもの

〈引用文献（報告書以外）〉

- 荒木ヨシ 1968 「縄文式時代の網代編み」『物質文化』12:20-26  
荒木ヨシ 1970 「東日本縄文後・晩期の網代編について」『物質文化』15:12-18  
荒木ヨシ 1971 「縄文式時代の網代編み」『物質文化』17:29-41  
植松なおみ 1980 「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』35:20-35  
小林行雄 1964 『続古代の技術』塙書房  
佐々木由香 2006 「割裂き木部材・蔓・草の編み組み加工容器」『考古学ジャーナル』542:13-19  
杉山壽榮男 1942 『日本原始繊維工藝史 原始編』雄山閣  
坪井正五郎 1899 「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』61:440-444  
東京都立大学人類誌調査グループ 2002 『人類誌集報2002』東京都立大学人類誌調査グループ  
名久井文明 1987 「東日本における樹皮利用の文化－加工技術の体系と伝統－」『国立民族学博物館研究報告』18(2):221-301  
名久井文明 1998 「縄紋時代から継続する編組技術－網代編みと縄目編み」『－縄文式生活構造－土俗考古学からのアプローチ』同成社, 24-61  
名久井文明 2004 「民俗的古式技法の存在とその意味」『国立歴史民俗博物館研究報告』117:185-240  
野田真弓 2005 「青谷上寺地遺跡出土のかご」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1』鳥取県埋蔵文化財センター, 93-138  
渡辺 誠 1976 「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』26:1-23  
渡辺 誠 1994 「編み物の容器－籠と筥・箕－」『季刊考古学』47:35-38  
渡辺 誠 1996 「マタタビ製のカゴ類」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』12:82-93  
渡辺 誠 1999 「タケ・ワラ以前の編組品」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』15:73-101

〈引用文献（報告書等、データ集成に引用した文献。本文中の遺跡番号順。著者名・調査機関名の前に遺跡番号を付す。〉〉

- 1 北海道埋蔵文化財センター 1981 『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡 北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 2 北海道埋蔵文化財センター 1989 『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』

- 3 杉山 1942
- 4 尾上町教育委員会 1979『青森県尾上町八幡崎・李平遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 5 青森県立郷土館 1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』
- 6 青森県教育委員会 1995『三内丸山遺跡』VI
- 6 青森県教育委員会 1997『三内丸山遺跡』IX
- 7 青森県八戸市教育委員会 2004『是川中居遺跡』4
- 7 村越 潔・工藤泰博 1972「青森県板柳町土井 I 号遺跡」『考古学ジャーナル』75:7-8
- 8 板柳町教育委員会 1992『土井 I 号遺跡』
- 9 宮城県一迫町教育委員会 1997『国指定山王囀遺跡発掘調査報告書』2
- 10 秋田県教育委員会 2000『戸平川遺跡』
- 11 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 1996『押出遺跡』（特別展 展示図録）
- 12 福島県大沼郡三島町教育委員会 1990『荒屋敷遺跡』II
- 13 鹿沼市教育委員会 2002『明神前遺跡：発掘調査概要報告書』
- 14 栃木県教育委員会 1998『寺野東遺跡IV 縄文時代谷部編』1
- 15 埼玉県立博物館 1984『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書 人工遺物編』
- 16 桶川市 1990『桶川市史』第九巻補遺編
- 17 弓 明義 1998「吉見町三ノ耕地遺跡の集落と水場」『考古学ジャーナル』436:25-27
- 17 文化庁 1999『発掘された日本列島 1999』朝日新聞社
- 18 中野区・北江古田遺跡調査会 1987『北江古田遺跡発掘調査報告書』
- 19 下宅部遺跡調査団 1999・2000・2001『下宅部遺跡 発掘調査概報』東村山市遺跡調査会
- 19 下宅部遺跡調査団 2006『下宅部遺跡』I 東村山市遺跡調査会
- 20 多摩区 No. 61 遺跡発掘調査団 1998『川崎市多摩区 No. 61 遺跡（宿河原縄文時代低地遺跡）発掘調査報告書』
- 21 玉川文化財研究所 2003『羽根尾貝塚』
- 22 青海町 1987『史跡寺地遺跡』
- 23 新潟県教育委員会 2004『青田遺跡』
- 24 桜町遺跡発掘調査団 2001『桜町遺跡 調査概報』
- 24 小矢部市教育委員会 2004『桜町遺跡発掘調査報告書』第1分冊
- 25 能登町教育委員会真脇遺跡発掘調査団 1986『真脇遺跡』
- 26 福井県教育委員会 1979『鳥浜貝塚－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1－』
- 26 福井県教育委員会 1987『鳥浜貝塚－1980～1985年度調査のまとめ－』
- 27 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003『四方谷岩伏遺跡』
- 28 掛川市教育委員会 2006『八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡』
- 29 豊田市教育委員会 1975『豊田市埋蔵文化財調査集報』第2集
- 30 滋賀県文化財保護協会 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会
- 31 滋賀県教育委員会 1997『粟津湖底遺跡第3貝塚』
- 31 滋賀県教育委員会 2000『粟津湖底遺跡 自然流路』
- 32 鳥取県教育文化財団 1981『布勢遺跡発掘調査報告書』
- 33 福部村教育委員会 1989『栗谷遺跡発掘調査報告書』2
- 34 久留米市教育委員会 2006『正福寺遺跡 第7次調査概要報告書』
- 35 佐賀県立博物館 1975『坂の下遺跡の研究』
- 36 佐賀市教育委員会 2006『東名遺跡群発掘調査概要報告書1 東名遺跡』
- 37 長崎県教育委員会 1985『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書第71集
- 38 宇土市 2002『新宇土市史』資料編 第2巻

縄文時代のかごの研究

- 38-43 九州縄文研究会 2006『第16回九州縄文研究会大分大会 九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』
- 39 牛深市教育委員会 1989『椎ノ木崎遺跡試掘調査報告書』
- 41 大分市教育委員会 2003『海部古墳資料館特別展 照葉樹林に暮らす縄文人と交易』
- 43 東門研治 2000「〈速報〉伊礼原C遺跡」『考古学ジャーナル』454:26-31

## A Study of Basketry in the Jomon Period

YANAGIHARA Shoko

Basketry is the tool which has been used for a long time. This paper refers to the basketry and such weaved products unearthed from sites of Jomon period in Japan.

First, I surveyed the history, method and assignments of the study of wooden weaved products. Then, I gathered the information of the weaving remains in Jomon period from excavation reports and relics themselves. From these data, I examine the tendency of the usage of the basketry in this Period. Remains of basketry first appeared in early time of Jomon period, and it has been used long until present. It is highly possible that the basketry would be discovered from earlier remains. Noticing the area, the basketry remains are discovered more in Tohoku, Kanto, and Kyushu area. The bias of the area may be caused by the remaining condition, but some bias might exist already in Jomon period. The situation of the unearthed basketry in the sites can be roughly classified into 4 categories: inside of the holes for keeping food, sites concerning water, kitchen midden or such dumping spot, and secondary sedimentation. The situation must be affected strongly by the condition of remaining, but it is very significant to notice the situation as the study of techniques of weaving. The techniques of weaving have some tendency according to the area. While “Mojiri Ami” is discovered mainly in Hokuriku, Tokai, Sanin, and Kyushu area (Western part of Japan), “Ajiro Ami” is discovered more in Kanto, and Northern Area. And from the data, it is clear that in the early time of Jomon period most of the techniques seen in the posterity had been established already.

The latter of the paper, I examine the remains of basketry from Higashimyo site in Saga prefecture. It is very remarkable site from latter parts of early time of Jomon period, because many baskets are found there. The variety of techniques found in this site teaches us that weaving techniques had established already in those day.